

幼稚園におけるテレビ視聴に関する研究(3)

— 幼児の反応を基に —

橋爪 千恵子

(常葉学園短期大学)

1. はじめに—研究目的—

本研究は幼児教育の内容を追究することを本来の目的とし、これまでに(1)静岡県下の幼稚園でのテレビ視聴の実態(2)テレビ視聴に対する保育科学生の捉え方について、絵本の読み聞かせとの比較という観点で調査・考察してきた。今回は、当事者である幼児の反応を基に考察する。

2. 研究方法

絵本の読み聞かせとビデオテープ(以下ビデオと略す)の視聴に対する幼児の反応を得るため、次のような調査を行なった。

- (1) 対象 静岡県内私立幼稚園年長T組(男児12名、女児12名)
- (2) 日時 1994年12月 7日、12日 10:50~11:10
- (3) 手続き T組の担任による絵本の読み聞かせとビデオの視聴(絵本『すてきな三にんぐみ』『かいじゅうたちのいるところ』及び各々のビデオ使用—ヤマハビデオライブラリー発行)
- (4) 内容 絵本の読み聞かせ中とその後の保育者とのやりとり、ビデオ視聴中とその後のやりとりで幼児の表情・発言・態度などを複数(8人)の観察者の目で見えて記録する

3. 結果と考察

(1) 幼児の反応

絵本『すてきな三にんぐみ』では、保育者が絵本の表紙を見せると題名を読んだり、「これ、家にある」「これ、見たことある」等の反応を示す。読み進めていくと絵本の言葉を真似て言ったり、「いちもくさん?」等と聞き返したり「そう」とうなずいたり、絵本の言葉に沿って動作(マサカリを振りあげる真似)をしたりする。聞いているうちに思い出したのか「図書館で借りたよ」という発言も出る。幼児が保育者の読み聞かせをよく聞いているという印象をうける。

そのビデオ作品では、まず初めのナレーターの歌う声にみんな笑う。「おった」という言葉に「おった?」と言って笑う。金貨を落とす「チリン、チリン」という擬音に「わっはっは」と笑うなど、ナレーターの声

や音に反応しているという印象である。ビデオの終わりの場面では「終わり?」「これで?」と、もの足りなさそうな発言が聞かれた。

絵本『かいじゅうたちのいるところ』では、保育者が表表紙と裏表紙を開いてみせると、題名を読んだり「かいじゅうドラゴン」「かいじゅう〇〇」等と言いつつ始め少しざわつく。しかし、保育者が読み始めると静かになり聞く。「森や野原だって」「どんどん生えてだって」「へーえ」「すげえ」とか、かいじゅうがうなる場面で「うおー」と声を出す子や「しー」と静かにするように注意する子など、文章や絵に呼応した自由な発言も出るがほとんどの幼児がよく聞いていた。

また、怪獣たちが踊っているページは文章がないが体を動かす子が何人かあらわれた。ひとりひとり違う動きをしているのが印象的だった。

このビデオ作品では、第一場面に「手しかない、変なかいじゅう」と言う。マックスが暴れる場面は静かに見ているが、タラランタラランという音楽が流れると「あははは」と笑う。怪獣おどりの場面で音楽が流れると「おもしろい」「あはは」と笑う。終盤の頃、女児の私語が聞かれる。ビデオが終わると「もう終わっちゃった」「はやーい」と口々に不満そうな声を出す。

(2) 考察

上記のような読み聞かせ中の反応とその直後の保育者との会話での幼児の発言や、ビデオ視聴中の反応とその直後の会話とを総合して、次のような観点で考察してみたい。

① 内容の把握

幼児たちは読み聞かせ後の保育者との会話の中で、「どうして〇〇なの?」と自分なりに内容を理解した上で質問や疑問を出したり、ある場面を指して「ここがいい(やさしい)、どろぼうじゃないみたい」とか「このページの〇〇がこう言っているのがおもしろい」とか、内容に関する感想が聞かれた。また、「ここにフクロウがいる」「この怪獣、ぶたみたい」「ここにひげが生えてる」「スプーがある」など、実に細かく絵を見ていることがわかる。絵本は絵が動かないから読み手が読んでいる文章を聞きながら、幼児が自分の

ベースですみずみまでじっくり絵を見ることができるので、その子なりに強く印象づけられ内容も把握しやすいのだと思う。

一方、ビデオ視聴後の幼児の感想には「ボボボーというのがおもしろかった」「音楽がおもしろかった」「声がおもしろかった」というように、内容については効果音やバックに流れる音楽など表面的な映像を捉えていることがわかる。

(1)にあるように、幼児たちはビデオに対して「もう終わり？早い」とそのスピードに驚き、不満を述べていることからわかるように、ビデオは幼児たちのベースとは異次元の部分を持つ。内容を把握しないうちに画面がどんどん進んでいってしまうということであろう。

②集中度

この点は幼児の表面上の姿だけでは捉えにくい（よそを見ているようでも集中して聞いている場合もある）が、絵本よりもビデオの方が画面をよく見ているといえる。絵本では文章が長かったり興味のない部分では、絵本から目が離れ、いわゆる手いたずらを始めたり席を立ったりする。絵本の方を見続けるには、読み手の技術もさることながら幼児自身の興味・関心とあるエネルギーを必要とする。それは幼児の個人差からもちょう。しかしビデオ（テレビ）は今日、幼児の日常生活の一部ともなっていて、それを見ることは内容が面白いかな否かに拘らず苦にならないのであろう。

③記憶性

『すてきな三にんぐみ』の絵本で、「獲物」という言葉を聞いた幼児が「うさぎ？」と保育者に問うという反応があった。これは、この子が保育者の読むのをよく聞いていたということと、その言葉から狩りの場面を連想したことがうかがわれる。これはこの幼児の過去の経験から出たものだろう。また(1)で述べたように絵本の表紙を見て「これ家にある」「見たことある」という反応や、途中で「図書館で借りたいよ」と気づいた点なども併せ、絵本の方が心に残りやすいと言えそうだ。

④想像性

絵本『かいじゅうたちのいるところ』の読み聞かせ後、「どうして木が生えたんだろう？」「じゅうたんの下に種がまいてあったんじゃない？」とか「マックスが戻ってきた時には木はなかった」「お母さんがノコギリで切ったのかもしれない」「枯れたんだよ」というように、様々な疑問を口にしたり、それに答えようとする幼児の姿が見られた。ある場面の絵から次の

場面の絵までを自分の想像力を駆使して、その子なりの動きを作り物語をつなげているのである。だから友達からの疑問に自分の想像力で応えることができるし、友達の意見（想像）を聞くことで更に想像を広げるという作業をしているように思う。想像という作業をするからこそ絵本は幼児の記憶により残りやすいのではない。ビデオでは視聴者全員が同一画面の動きの世界に置かれる。この場合は一連の動きを見ていればいいので受動的である。怪獣踊りの場面では、絵本の場合には教師が「どんな踊りかな」という問いに体を動かす子も見られたが、ビデオでは画面の踊りを見て笑うだけで、体を動かす子が見られなかった点も両者の違いである。ビデオでは幼児が個々に想像をするという作業が行なわれにくい一例といえよう。

4. 結語

今回の調査結果で得られたように、集中度や連続性の動きというビデオの特性を生かした教材の選択や利用方法はより研究されるべきであろう。しかし、絵本のビデオ版はスピード性、画一的な動きがあるがために、幼児の内容理解や想像力、語彙力を育てる力が弱いのではないだろうか。ビデオの視聴は、やはり研究心に富んだ保育者の読み聞かせとは、根本的に異なるものといえよう。幼児にとって、保育者に絵本を読み聞かせてもらうこととビデオを視聴することとは、たとえ同じ作品でも全く別の文化財との関わりと言える。

幼児教育の場では、文化財と幼児の関わりは保育者が選択・決定した内容が幼児たちに受動的に与えられる場合が多い。したがって、人間教育の土台である幼児期には想像力や語彙力、創造力など心を豊かに育てるような保育内容とそれに沿った文化財の選択が重要である。また、人と人（保育者と幼児、幼児と幼児）との関わり大切さは言うまでもなく、幼児期から自分の考えを持ちそれを表現する力を育てることも幼児教育の目標であることを考えると、絵本を読み聞かせる代用としてビデオを視聴させるだけというのは避けたい。一時の幼児の反応だけでビデオを利用するのではなく、先に述べたようにビデオでなければ見せられないという、その特性を最大限に生かした利用法が保育現場での課題だと思われる。

【付記】

今回の調査は筆者のゼミの学生と共に行なった。幼児の反応に関してはより正確を期するため、その表情・発言・態度などについて8人の記録を突き合わせ確認した。ご協力いただいた幼稚園に深く感謝したい。